

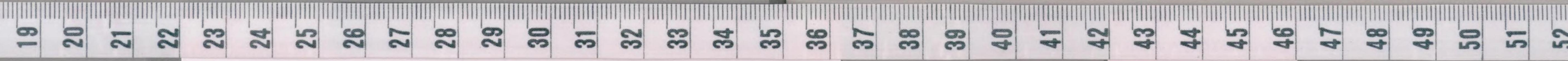


あふきの草紙

2
41

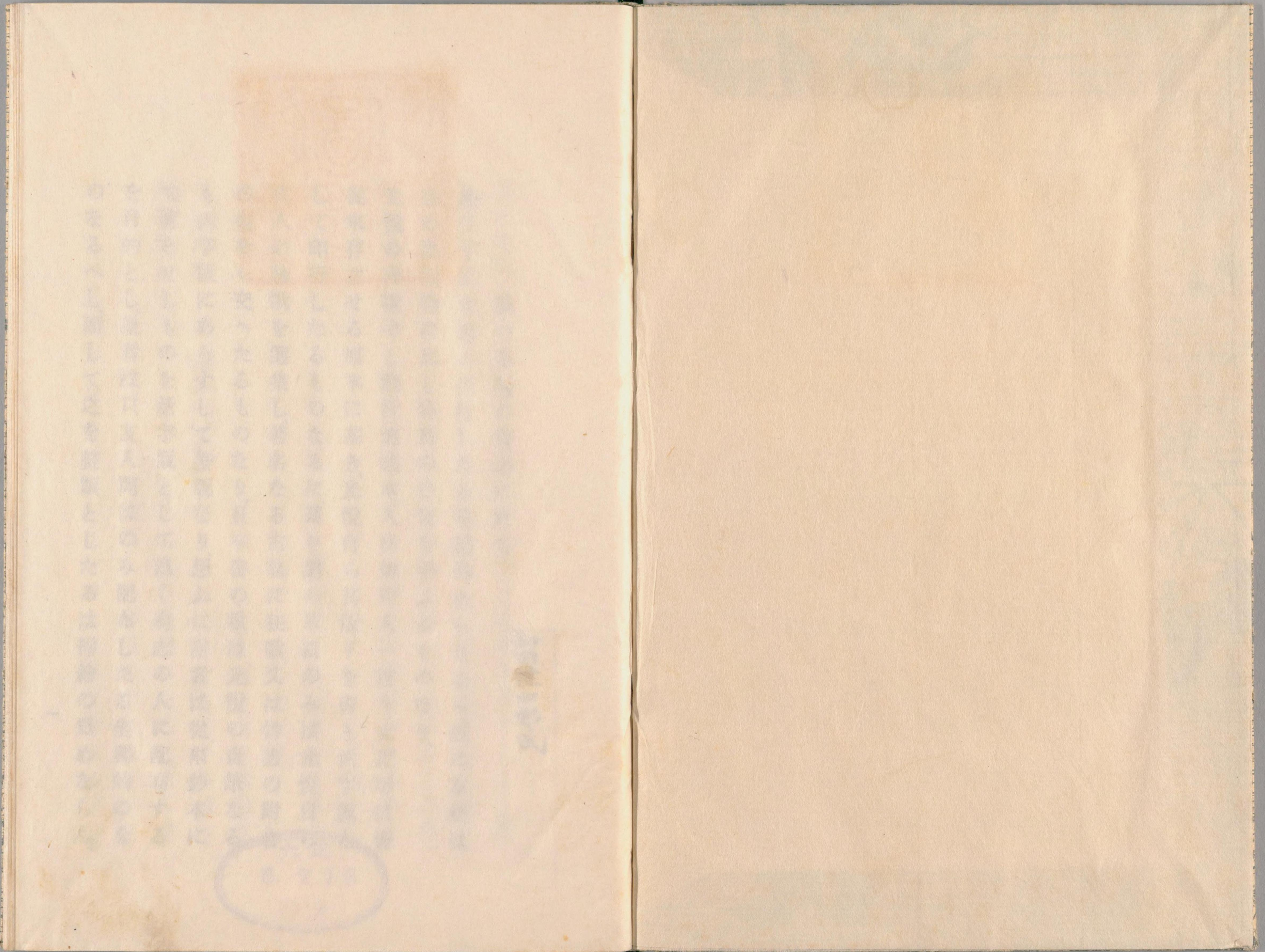
別圖

5-2
3-4



国立国会図書館 タイトル『あふきの草紙』 請求記号 寄別5-2-3-4

ガラス使用





扇の草紙の覆刻に就て

和田耕四郎氏

慶長年間光悦か印行したる書籍尠からざるも、扇の草紙は他の出版物に比し特殊の性質を帯ふるものなり、光悦の出版せし觀世流謠本、久世舞、百人一首、方丈記等は皆從來存在せる原本に基き、光悦自ら其版下を書き活字版として印行したるものなるに、單り扇の草紙のみは光悦自ら古人の詠歌を選集し、著名なる古歌に狂歌又は俳諧の附合の句をも交へたるものなり、且本書の歌は光悦の自筆なるも、活字版にあらずして整版なり、想ふに前者は從來鈔本にて流布せしものを活字版として汎く有志の人に配布するを目的とし、後者は只友人間にのみ配布したる坐輿的のものなるへし、而して之を整版としたるは挿繪の爲めならん、



扇の草紙は其今日に存在するもの極めて稀なり、予か所蔵するものは並紙摺にして紙數二十葉、撰歌八十首あり、又黒川眞道氏の所有するものは種彦の用捨箱に引證したる吳粉引、色變り摺（嵯峨本の伊勢物語に同じ）のものにして十五葉半の缺本なり、此二本の外他に存在するものあるを聞かず、是れ恐くは前述の如く友人間のみ配布したるか爲めならん、扇の草紙は八十首にて完全なるや、或は百首にあらざるやの疑を存するものあれば、予か藏本と黒川本とは其綴方不同にして一定の順序によらざるに拘らず、黒川本に存在するものは皆予か藏本にあり、唯黒川本には四葉半即十八首の撰歌を缺くのみ、且頃日扇の草紙と題せる寫本を見たるに其歌、挿繪とも光悦本と異り、且遙に後年の作たること疑

なしと雖も、是亦八十首にして百首にあらず、恐くは後人か光悦の扇の草紙に倣ひたるものならん、此等の事實より考ふるときは、扇の草紙は八十首、紙數二十葉を以て完全なるものと認むへし、

前述の如く此草紙は存在極めて稀にして、且光悦の選集にして他に之を覆刻せしものなきを以て、予は其埋滅を憂ひ茲に之を覆刻して同好の人に頒つものなり、尙参考として撰歌の出處を明かにせんと欲したれども、世人の普く知れる古歌の外は之を搜索すること予か如き其道にうときものには容易ならず、夫等は識者の教を俟つて他日補正すへし、

大正六年春

和田維四郎識す

二

あふきの草紙 八十首 新古今集卷二 春下 山邊赤人 題しらす

扇の草紙

一、もゝしきの大みや人はいとまあれや櫻かさしてけふもくらしつ

新古今集卷二 春下

題しらす

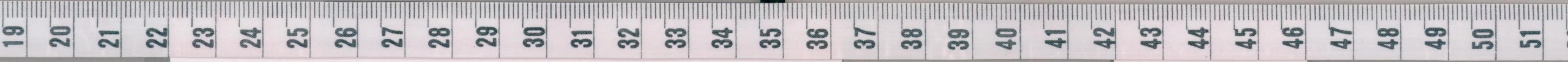
山邊赤人

二、野のみやのもりの木からし秋ふけて身にしむけふのきえかへるかな

未詳

三、よこはしるあしまのかにも雪ふれはあさゝむしとて水にこそいれ

夫木集卷二十七 雑 動物



蟹

蘆間雪

源 仲 正

横はしるあしまのかにの雪ふれはあなさむげにやいそに隠るい

四、大江山いく野の道のとをければまたふみも見ぬあまのはしたて

金葉集卷九 雑上

小式部内侍

五、あつまちのふはの關屋のいたひさし月もれとてやまはらなるらむ

未詳

六、はま里に松のおち葉をかきなれてあすのたきゝの風をこそまで

未詳

七、有明のつれなく見えしわかれよりあかつきはかりうきものはなし

古今集卷十三 戀三

壬生忠岑

八、紅葉はのこきはわか身のおもひにてうすきは人の情なりけり

未詳

九、こき出すふねにたはらを八つみて四こくはうみの中にこそあれ

犬筑波集 雑

四國はうみのなかにこそあれ

漕出す舟に俵を八ッ積て

十、山人のたきゝに花をおりそへておもふまゝにはいはれさりけり

犬筑波集 雜

おもふまゝにはいはれさりけり

山人の薪に花をおりそへて

十一、から衣きつゝなれにしつましあれははるゝきぬるたひをしそおもふ

古今集卷九 羈旅

在原業平朝臣

伊勢物語

十二、やせうしにふまれな道のかたつふりつのありとも身をなたのみそ

未詳

十三、世の中をなにゝたとへん水鳥のはしふる露にやとる月かけ

未詳

十四、ふめはをしふまねはゆかむかたもなし心つくしの山櫻かな

千載集卷二 春下

落花満山路

赤染衛門

二句千載集には「ふまてはゆかむ」とあり

十五、波にふていそにすゝりかあれはこそいはまいはまにかきはつくらん

未詳

十六、われ見ても久しくなりぬすみよしのきしのひめ松

いくよへぬらん

古今集卷十七 雑上

伊勢物語

題しらす

讀人しらす

三句古今集には住の江のとあり 又伊勢物語には住吉のとあり

十七、むさし野は月の入へき山もなし草より出て草にこそいれ

この歌出所明からず、元和三年の徳永種久紀行に、

ゆんてをみれば、むさしのは月のいるさ。山もなし草より出て草にこそいれとふるさうたにもよまれたり

とあれはその頃既に古歌と思はれしものと見ゆ又

續古今集卷五 秋下

建保三年内裏の歌合に

大納言通方

むさし野は月の入るへき嶺もなし尾花か末にかゝる白雲とある歌及び

後撰集卷十九 羈旅

貫之

都にて山の端に見し月なれと海より出て、海にこそいれなどの諸歌より轉訛せしものか

十八、風もなし雲のけしきもよかりけりかのつの舟のいてやするらん

未詳

十九、かくはかりへかたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな

拾遺集卷八 雑上

藤原高光

二十、秋の夜のかたわれ月のかたはありけるものを池のみきはに

未詳

二十一、さくら咲遠山鳥のしたりをのなかくしくもあ
かぬ色かな

新古今集卷二 春下

太上天皇

四句なかくし日をとあり

二十二、山田もるそうつの身こそかなしけれ秋はてぬれ
はとふ人もなし

續古今集卷十七 雜上

僧都玄實

山田もるそほつの身こそ哀なれ秋果てぬれは訪ふ人もなし

二十三、身をすてゝ花をゝしとやおもふらむうてともた
ぬ鳥そありけり

未詳

二十四、山たかみ雲井に見ゆるさくら花こゝろの行てお
らぬ日そなき

古今集卷七 賀

二十五、見わたせは柳櫻をこきませてみやこは春のにし
きなりけり

古今集卷一 春上

素性法師

見渡せは柳さくらをこきませて都そ春のにしきなりける

二十六、いとふとてつれなき人をみそき川こひを衣に神
やうくらん

新續古今集卷十二 戀二

戀

前大納言實教

御板川逢ふ瀬はよそになりけりつれなき人を神やうくらん

五

とある歌より轉訛せるものか

二十七、いたつらにすくる月日はお、けれと花見てあそ
ふ春はすくなし

古今集卷七 賀

藤原興風

徒にすくるつき日はおもほえて花見てくらす春そ少なき

二十八、なげやた、よもきにましるきりくす秋の別を
さそこかるらん

未詳

二十九、人の子のおやにゝるなるものをとてこひしき時
はかゝみをそ見る

未詳

三十、ものゝふのゆみはり月の影見ればあけぬにも鳴せ

きのは鳥

未詳

三十一、ものいへはちゝはなからのはし柱きしもなかす
はいられさらまし

神道集 安居院聖覺 諺語大辭典所引

ものいへは父は長柄の人柱鳴かすは雉子もうたれましきを

三十二、うくひすの花ふみちらすほそはきを大なきなた
てさふときらはや

未詳

三十三、いにしえの野中の清水としふれともとのこゝろ
をしる人そくむ

古今集卷十七 雑上

題しらす

讀人しらす

古の野中の清水ぬる^〇けれ^〇ともとのこゝろをしる人そく^〇む

三十四、 つの國のつゝみの瀧をうち見ればたゞ山川のな
るせなりけり

未詳

三十五、 櫻ちる木の下風はさむからてそらにしられぬ雪
そふりけり

拾遺集卷一 春

亭子院の歌合に

貫 之

五句「ゆきそふりける」とあり

三十六、 むさしあふみさすかにかけておもふにはとはぬ
もつらしとふもゝのうき

伊勢物語 十三段

武藏鑑さすかにかけてたの^〇むには訪はぬもつらし訪ふも^〇う^〇る^〇さし

三十七、 大井河いそのいかたをくたすにはしつのおのこ
のゑいやこゑして

未詳

三十八、 かさゝきのわたせる橋にをくしものしろきを見
れはよそふけにけり

新古今集卷六 冬

題しらす

中納言家持

五句「夜そふけにける」とあり

三十九、 風ふけはおきつしらなみたつた山夜はにや君か
ひとりゆくらん

古今集卷十八

伊勢物語及大和物語

題しらす

読人しらす

風ふけはあきつ白浪たつた山夜はにや君か獨りこゆるむ

四十、たれかまたいしにゑほしをきせつらんかたくと
してよきおとこかな

未詳

四十一、ほのくと明石の浦の朝きりに鳴かくれ行舟お
しそおもふ

古今集卷九 羈旅

題しらす

読人しらす

この歌の讀人を柿本人麿とするものあり

四十二、わか^の浦や松の葉こしになかむれはこすゑによ
するあまのつり舟

新古今集卷十七 雑中

眺望

寂蓮法師

和歌の浦を松の葉こしに眺むれは梢によするあまのつり舟

四十三、さかへゆくゆみやの家のとりくに此たひこと
に名をあくるかな

未詳

四十四、戀しくはたつねてもこよわかやとのみわの山も
とすきたてるかと

古今集卷十八 雑下

題しらす

読人しらす

我庵は三輪の山もと戀しくはとふらひきませ松たてる門の轉訛か
四十五、道の邊のたよりのさくらおりそへてたきゝやお
もき春の山人

未詳

四十六、松かけのいはひの水をむすひかけ命なかへのひ
しやくなりけり

未詳

四十七、なるこをはをのかは風にうこかしておのれとさ
はくむらすゝめかな

撰集抄卷二上 覺尊に向て乞食僧の詠みし歌

四十八、人ならばまてといはまし郭公ふたこゑとたに行
てなくらん

未詳

四十九、月かくす華のこゑたのしけきをはきりたくもあ
りきりたくもなし

犬筑波集 雜

きりたくもあり切りたくもなし

盗人をとらへて見れば我子なり

さやかなる月をかくせる花の枝

とある附合より轉訛せしものなるか

五十、田子の浦つりするさほにはねられてふちのたかね
にあかりこのしろ

未詳

五十一、とらと見ているやもいわにたつものをなとわか

五十二、むさし野はけふはなやきそわか草のつまもこも

未詳

れりわれもこもれり

伊勢物語 十二段

古今集卷一 春上

題しらす

読人しらす

春日野はけふはな焼きそ若草の妻もこもれり我も籠れり

五十三、わかこひは年ふるかいもなかりけりうら山しき

は宇治のはしひめ

千載集卷十二 戀二

題しらす

藤原顯方

六十一、わか戀は年ふるかひもなかりけり美ましきは宇治の橋守

五十四、たかゝりにいつれは鳥のなかりけりこはたの山
に鳥やすむらむ

未詳

五十五、月をまつまつには月のいてもせて人をまつ夜そ

月は出けり

未詳

五十六、あふ時はかたりつくすとおもへとも別になれば
のこる言葉

未詳

五十七、山田もるいほりまちかくなく鹿におとろかさ
れておとろかさかな

+

未詳

五十八、しゝならは十六つれてゆくへきにくゝにもれつゝひとりはしるか

未詳

五十九、くものいゑにあられたるこまはつなくともふたみちかくる人はたのまし

未詳

六十、華さかはつけんといひし山里のつかいはきたり馬にくらおけ

從三位頼政卿集 春

花さかは告よといひし山寺のくる音すなり馬に鞍をけ

六十一、吉野山はるのふゝきをわたるにはくゝりもとかすあしもぬらさす

未詳

六十二、さてもまたいかなる夜はの月さえてうき面影のさそひ行らむ

新後撰集卷十四 戀四

題しらす

前大納言 基良

さても又いかなる夜半の月影にうき面影をさそひそめけん

六十三、梅の花たか袖ふれしにほひそと春やむかしの月にとはゝや

新古今集卷一 春上

六十四、 我かこひはよとの河瀬のつなきこい身をも心に
まかせさりけり

未詳

六十五、 雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月
を見るかな

新古今集卷四 秋上

攝政太政大臣

六十六、 あつま地はいつくもふしの日影にてあしたか山
の松のむらたち

未詳

六十七、 とくさかるそのはら山の木のまよりみかゝれ出

る秋の夜の月

夫木和歌抄卷二十 山

源 仲 正

とくさかるそのはら山の木の間よりみかきていぬる秋のよの月

六十八、 きりの木のいかななるへきはしとてやわつかの
川とひきわたせける

未詳

六十九、 めくりあへあしよは車ゆきやらてさもとゝこほ
りこひち成けり

未詳

七十、 いかにせむわかれし夜はをなかむれはなくさむや
との有明の月

千載集卷十三 戀三

攝政前右大臣

かへりつる名残の空をなかむれば慰めかたき有明の月
とある歌より轉訛せしものにはあらぬか

七十一、これやこの行もかへるも別てはしるもしらぬも
あふ坂のせき

後撰集卷十五 雜一

蟬 丸

七十二、駒とめて袖うちはらふ影もなしさのゝわたりの
雪のゆふ暮

新古今集卷六 冬

藤原定家朝臣

七十三、下もみちかつちるしくれもる山はぬれてやしか
のひとり鳴らむ

新古今集卷五 秋下

藤原家隆朝臣

下紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやしかのひとりなくらむ
四句五句ぬれてやひとり鹿のなくらむとある本もあり

七十四、みわの山たつぬる人も待にけん年はふるともあ
はしとおもへは

末詳

七十五、さほひめのみたれしかみの玉柳たゝ春風のけつ
るなりけり

玉葉集卷一 春上 柳

前中納言 匡房

佐保姫のうちたれかみの玉柳たゝ春風のけつるなりけり

七十六、ねかはくは花のもとにて春しなんそのこさくら
のもち月のはな

續古今集卷十七 雜上 花

西行法師

十三

山家集 春花

ねかはくは花の本にて春死なむそのきさらきのもち月の頃

七十七、うつゝの矢にあたりてしかの鳴つるはゆみはり月のいるかたを見る

未詳

七十八、つゝいつゝ井つゝにかけしまろかたけおひにけらしもないも見さるまに

伊勢物語 二十三段

筒井筒いつゝにかけしまろかたけすき^〇にけらしな妹見さるまに

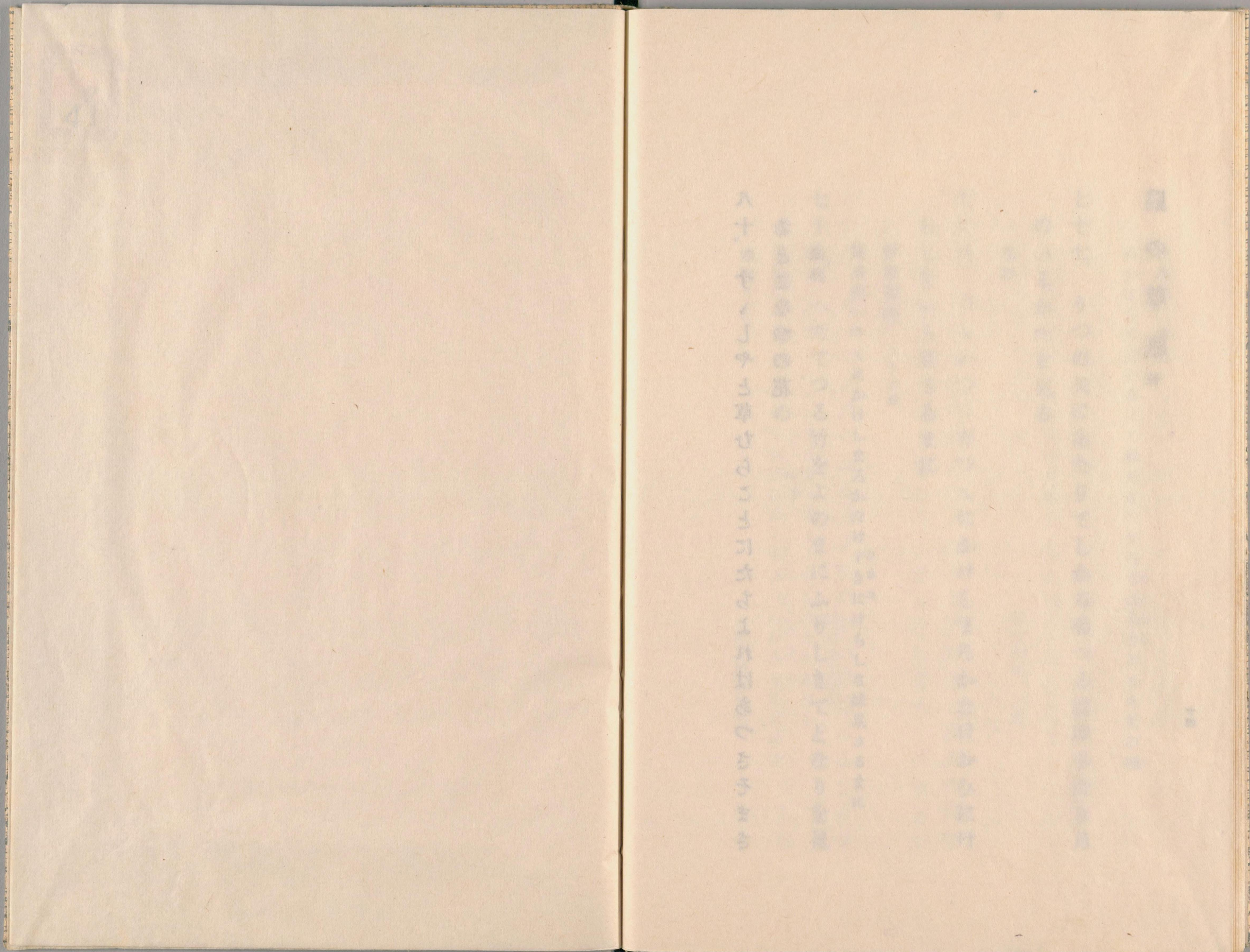
七十九、へたてつる竹をよのまにふりしきてとなりを見する雪のあけほの

未詳

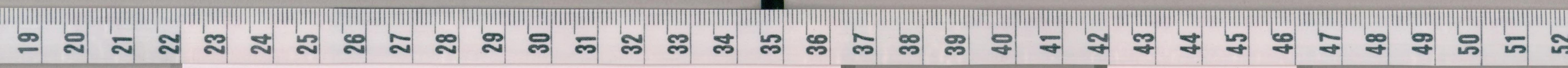
八十、すゝしやと草むらことにたちよればあつさそまさるところなつの花

未詳

扇の草紙終



八十八年、十一月、
...





国立国会図書館 タイトル『あふきの草紙』 請求記号 寄別5-2-3-4

ガラス使用



国立国会図書館 タイトル『あふきの草紙』 請求記号 寄別5-2-3-4

ガラス使用